

各位が培ってきた技術は、「妥協」のために、つまりは部分的であったり矮小化されて行使されるべきではない。アートは、「アートなんて無意味だ」とか「どうせいつか死ぬ」とかいう地点にたどり着いてしまっから、むしろそこから、そこをどう折り返して、還ってくるか、という、いわば「帰還の技術」の連続である。虚無と相対化の荒野は、到達地点であったとしても、目的地では決してない。無意味かもしれない、けど、やりたいんだ、と踵を返す。

## 黒田菜月

くろだ・なつき

1988年神奈川県生まれ。2011年中央大学卒業。2013年第8回写真「1\_WALL」にてグランプリを受賞。主な展覧会に、「けはいをひめてる」ガーデン・ガーデン（東京、2014）、「わたしの腕を掴む人」ニコンサロン（東京、大阪、2017）、「友だちの写真」ギャラリー OGU MAG（東京、2018）などがある。また、2016年からは横浜市立金沢動物園にて毎年行われているメディアアート展「ひかるとうぶつえん」に参加。2019年には同園にて写真と映像のグループ展「どうぶつえんの目」横浜市立金沢動物園（神奈川）を企画した。

妥協を「約束の凝集（Com-Promise）」として、途方もなく前向きに考える。それが妥協ではなく約束の凝集である限り、そこには未来の時間が含まれている。今回のαMは、5人のアーティストが、自分が生きて死ぬ時代に、それぞれのやり方で、未来を確信する技術の、研鑽と共有です。

αM Project 2020-2021

約束の凝集 Halfway Happy

Vol. 3

黒田菜月

写真が始まる

Natsuki Kuroda

The Photograph Begins

2021.3.16 TUE — 2021.6.5 SAT

13:00-20:00

日月祝休 入場無料

ゲストキュレーター 長谷川新

Guest Curator Arata Hasegawa

1 友だちの写真  
2018 (2021)  
25'

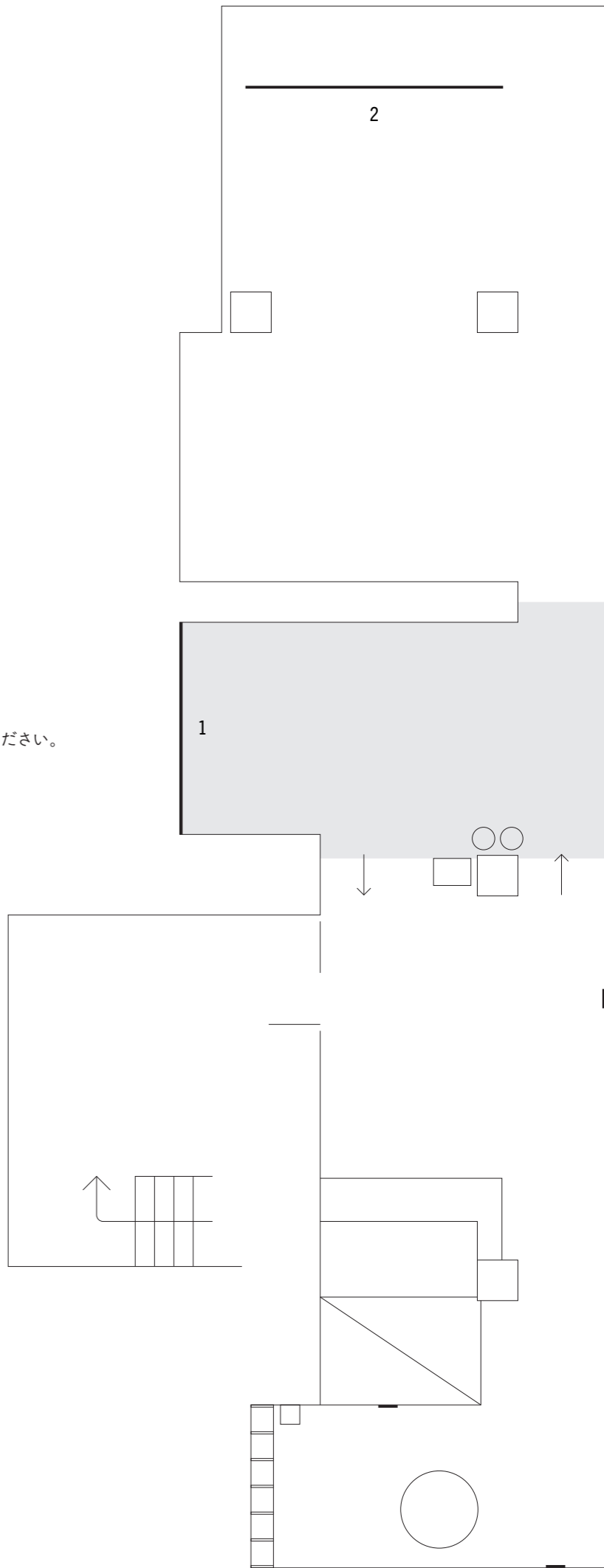
2 部屋の写真  
2021  
28'



映像には一部個人情報が含まれることから撮影はご遠慮ください。



待合室（上映エリア外）については撮影可能です。



αMプロジェクト2020-2021「約束の凝集」第3回は黒田菜月の個展「写真が始まる」である。本展ではふたつの映像《友だちの写真》と《部屋の写真》を上映する。《部屋の写真》については入れ替え制をとるため、鑑賞者の方々は会場を待合室のように利用していただければ嬉しい。それぞれ30分弱の映像作品である。

黒田菜月は写真家であり<sup>1</sup>、作品のタイトルにはいずれも「写真」という語がつけられている。会場にはいくつかの写真が額装されているはずだが、展示しているというよりは、待合室にそれとなく佇んでいる風景の一部、という性質が強い<sup>2</sup>。メインとなるのは、あくまでもふたつの映像である。ここにまずツイストがかかっている。写真と名づけられた映像。

だがこのねじれは鑑賞すればすぐにほどけていくと思う。《友だちの写真》も《部屋の写真》も、写真が重要な道具立てとなっている。《友だちの写真》では動物園で子どもたちがふたつのチームに分かれて写真を撮り、手紙を書くが、それぞれのチームの子どもたちが顔を合わせることはない。《部屋の写真》も、黒田が撮影した写真をもとに介護者が言葉を重ねていくが、聞き手である私たちがその部屋の住人を眼にすることはない。写真を通り抜けることでしか、より正確に言えば、写真について語る言葉をたどり直してみることでしか凝視できない人間がいる。黒田の映像において、写真は鏡でも窓でもなく、壁のようなものとしてある。シモーヌ・ヴェイユが書いたように、「壁はふたりを隔てるが、意志の疎通を可能にもする<sup>3</sup>。」写真は、打ちっぱなしのコンクリートのように、それ自体は何も語らず、とても冷たい。だがそれは沈黙の強制を意味しないし、高尚な言葉のみを通過させるわけでもない。言葉は、不正確で、誇張があり、たどたどしいとしても、あるいはあまりに克明であったとしても、壁を震わせる。

写真をめぐる実践には絶えず「撮る／撮られる」「見る／見られる」の関係があり、その非対称な構造ゆえに権力と暴力の問題が必然的に発生する。この事実に向き合うことが誠実であることは論を俟たないし、具体的に傷つく人が存在していることは見過ごされてはならない。そのうえで、黒田は、写真のもつ暴力性への自覚の誇示とは異なる方向に自身の技術を使役させる。黒田はその暴力性の前で態度を保留しない。一緒に悩んで欲しいというようなメッセージも潜んでいない。黒田の放つメッセージはどこまでもクリアだ。それは、写真はあっていい、という鮮烈な提案である。写真を観て、言葉にすることは楽しい。

実在する一枚のモノクロ写真から長大で複雑な小説を書き上げたりチャード・パワーズのように、写真を起点に想像力を爆発させるのも最高ではあるのだが、本展で営まれているのは、どちらかと言えば、写真から言葉に、言葉からまた写真に戻りつつ、ミニマムな翻訳を繰り返していくような実践である。また、《部屋の写真》に黒田がとりかかったのは2017年頃であり、《友だちの写真》に先行している。というより、ふたつの撮影は並行している。時系列的にも、黒田の思考のなかでも、決して直線的とは言えない、少しずつ切れ目の入っているその時間の経過を、じっと、露光時間と呼ぼう。どちらの映像にも、「写真はこんなにもまだ観ることができるのか」と目が醒めるような手応えがあり、自分がおそらく出会うことのない誰かにとっても写真が始まったと信じられる経験がある。

1 黒田のウェブサイトは以下。  
<https://www.kurodanatsuki.com/>



2 壁にかけられた写真は定期的に黒田によってかけ替えられる予定だ。  
3 シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』富原真弓訳、岩波文庫、2017年、p. 250

## 上映作品



友だちの写真 2018 (2021), 25'

2018年5月に、黒田は横浜市立金沢動物園で子どもたちを対象としたワークショップをおこなった。子どもたちは写真を使って問題をつくる「問題チーム」と、その問題を解く「推理チーム」の2班に分かれて動物園を歩き回る。お互いが顔を合わせることはないなかで、写真を通してどのようなやりとりが行われるのか。

本作品は、2018年の12月にギャラリー OGU MAGにて3日間限定で公開されたものを本展用に一部再編集したものである。



部屋の写真 2021, 28'

黒田は2017年頃から断続的に介護の現場の人々の撮影やインタビューを重ねてきた。介護者に手渡される写真は、かつて介護者自身が介護をおこなっていた人の部屋の写真である。彼ら、彼女たちがその写真から何を見つけ、何を思い出し、どのように自分に引き寄せて言葉にしていけるか。写真を観て語るその時間に、黒田は同行する。

## 上映スケジュール

13	00	友だちの写真	
	30		部屋の写真
14	00	友だちの写真	
	30		部屋の写真
15	00	友だちの写真	
	30		部屋の写真
16	00	友だちの写真	
	30		部屋の写真
17	00	友だちの写真	
	30		部屋の写真
18	00	友だちの写真	
	30		部屋の写真
19	00	友だちの写真	
	30		部屋の写真

《部屋の写真》につきましては、途中入場はご遠慮いただいております。